國學院大學学術情報リポジトリ

中世フランス王権のイメージ形成：聖王ルイの事績と奇蹟を中心に

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 小池, 寿子, Koike, Hisako
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000763

中世フランス王権のイメージ形成
—聖王ルイの事績と奇蹟を中心に—

小池寿子

はじめに

中世キリスト教世界において、最初期に聖人として称えられた国王はイングランドのエドワード懺悔王（1004頃～1066年、在位1042～1066年、1161年列聖）とフランス、カペー朝国王ルイ９世（1214～1270年、在位1226～1270年、1298年列聖）の二人である。彼ら聖人王は、近世へと向かう両国家の礎を築いた。では、彼らは何故、列聖されたのであろうか。それはいかなる政治的・社会的、そして倫理的意図を有し、彼らのイメージは政治的宗教的プロパガンダにいかに用いられたのであろうか。本稿では、とくに聖人王のイメージ形成に大きく関与し、王権の顕彰化のパラダイムシフトとなったルイ９世に焦点を当てて、彼の事績を概観するとともに、列聖の要件となる奇跡について考察する。

１．ルイ９世の顕彰化

１—１　十字軍従軍中の死における善死

ルイ９世は、イングランド、フランドル、南フランス、北スペインのアラゴンなど諸侯権力の拮抗する混迷の時代に国家の礎を築き上げた国王である。のみならず対イスラームとの抗争、すなわち十字軍がキリスト教社会の命運を左右していたヨーロッパの岐路に立つ人物であった。1095年、第一回十字軍（1096～1099年）は1099年７月、エルサレムを占領して王国を建立、第４回十字軍（1202～1204年）のコンスタンティノープル占領によりラテン国家（1204～61年）が成立するも、東方支配はイスラームのみならずモンゴル帝国の侵攻の中で混迷の時期を迎えていた時期に、教皇インノケンティウス４世が発令した第７回十字軍の指揮官となったのは、かねてから十字軍参加の誓願を立てていたルイ９世であった。

ルイ９世の十字軍は、勢力を増していたマルムーク朝エジプトに照準を定めていたが、ダミエッタ（ナイル河口デルタ地帯の要衝、現ディムヤート）陥落後、

つづく実質上最後の第８回十字軍（1270年）従軍中に、ルイ９世はチュニスで病死する。1291年、エルサレム王国の首都アッコンはマルムーク朝第９代スルタン、ハリールによって陥落し、200年弱に及ぶ十字軍の歴史は幕を閉じることになる。

ルイ９世の十字軍の事績に勝るのは、しかし、軍事よりもチュニスでの死に際の行状である。1270年８月25日、病死したルイ９世の死に際については年代記など公文書が詳らかにしており、総じて、その概略は以下の如くである。

ルイ９世は死が間近であると知ると、「親愛なる息子（フィリップ３世）」を呼び寄せ、ミサが施行されて祈禱文が唱えられたことを知り、善き父が息子に与えるすべての恩恵を与えた。聖三位一体と全聖者が汝を祝福し、あらゆる悪から守り給い、神が汝につねに恩寵を授けられるように、アーメンと唱えた。病がますます彼を苛めると、教会の秘蹟を求めてあらん限りの力で受け入れた。祈禱者が終油を授け、七つの賛美歌を唱える間中、王はそれを繰り返し唱え、死際に、灰が敷かれた臨終の床、ないしは、床に十字形に灰を撒き、その上で息絶えたという[(1)](図１)。

キリスト教徒の死に際して必須の美徳とされた通り遺言を残し、かつ、十字架を模した身体の処し方に端的に読み取られるように、ルイ９世の謙遜の美徳はこの死に際に端的にあらわれている。のみならず、彼の美徳は十字軍従軍中での戦没者の遺骨を収拾するなど、七慈善の実践、さらに従軍後には修道院や慈善施設、とくにキリストの聖遺物を収納するためのサント＝シャペル建造によってパリをキリスト教国家の中心にした故であった。彼を列聖するためには、聖俗両界の要人および修道士、文書官ら数百人は関与していたとされ、彼の事績の確認と文書化、そしてイメージ戦略をそこに見ることが出来る。

図１　聖王ルイの死『ジャンヌ・デヴルーの時禱書』挿絵　fol.165v
1324～28年　メトロポリタン美術館　クロイスターズコレクション

1—2　聖王ルイのイメージ形成

聖王ルイについては、とくに、130点余を数える『フランス大年代記』他で詳らかとなっているが、それらの原典となったのは、ラテン語史書『1180年までのフランク人の諸事績』（*Gesta Francorum usque* 1180）である。それに続いてルイ王がサン＝ドニ修道院に依頼し、「Prima」なる修道士が1274年に完成させ、聖王ルイの息子フィリップ３世に捧げたフランス語『列王物語（王の物語）』（*Roman aux*（*des*）*rois*）が、のちの年代記（Chronicle）の基礎となっている(2)。

『列王物語』は聖王ルイ治世前で終わっており、続く史書は、聖王ルイを中心に据えているのである。中でももっとも重要な公文書『フランス大年代記』は、ヴァロワ朝シャルル５世治世下で制作されたフランス国立図書館所蔵写本（1375～79年　Bnf.ms.fr.2813　以下「パリ写本2813」と表記）である。そこではクローヴィスからシャルル５世に至るフランス王権の確立を視覚的に辿ることができ、貴重なイメージ資料となっている(3)。

「パリ写本2813」では、ルイの生涯については14点の挿絵が施され、特筆すべきは、ルイの誕生から悔悛までの６場面を四葉形の枠内に描いた頁であろう（図２）。

12世紀に慣例化された慈善行為は、『マタイによる福音書』（第25章35－37）に語られるイエスの言葉にもとづく。「飢えた者」「渇いた者」に飲食物を与え、「旅人」を迎え、「衣服のない者」に衣を与えること、さらに「病人の見舞」と「囚人の訪問」に加えて、「弔う者なき死者の埋葬」の七つとされた。

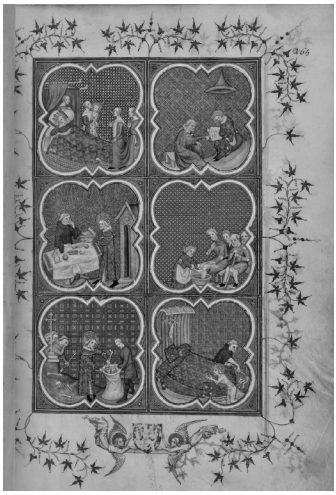


図２　聖王ルイの善行『フランス大年代記』挿絵　1375～79年
パリ　国立図書館所蔵写本mf.2813,fol.265

「パリ写本2813」の当該挿絵では、ルイ９世の誕生から始まり、王としての教育、貧者への施し、洗足、遺骨の収集、そして悔悛の鞭打ちまでの６場面が描かれ、とくに最下部、十字軍戦士の遺骸を弔った伝記にもとづく画面左下の死者の遺骨の収集が際だった特徴となっている。のちにルイ９世の曾孫フィリップ４世の三番目の妻ジャンヌ・デヴルーが注文した『時禱書』（1324～28年）は、ほぼ「パリ写本2813」中の聖王ルイの事績の描写と類似しており、同写本を祖型としていた事がわかる。以下、少し詳しく同『時禱書』を分析する（他の時禱書と区別するために『ジャンヌ・デヴルーの時禱書』と表記する）。

１―３　ジャンヌ・デヴルーの時禱書

小型の『ジャンヌ・デヴルーの時禱書』は、ジャンヌが1371年に死亡した後はヴァロワ朝シャルル５世賢明王、ついで弟の文芸擁護者にして蔵書家ベリー公ジャンへと受け継がれ、15世紀に至るパリ彩飾写本を牽引することになる。挿絵師はジャン・ピュッセルであり、ほぼグリザイユの挿絵が際立った特徴である(4)。

月暦から始まる前半部は、時禱書の核となる「聖母マリアの時禱」に挿絵が施され、左頁はキリストの受難、対応する右頁は聖母マリアと関わるキリスト幼年期の図像が配置されて、最後の終課では左頁にキリスト復活を配する(5)。ついで後半部冒頭、ジャンヌがサン＝ドニ修道院の聖王ルイの墓の前で祈禱する時、まさに聖王のヴィジョンを視る場面が描かれ（fol.102v.、図３）、ついで、聖王ルイの善行と奇蹟の挿絵を伴う９頁の「聖王ルイの時禱」となる。このヴィジョンが前半のキリストの生涯と後半の聖王ルイの生涯の描写の分岐点である。ヴィジョンという視覚接触がジャンヌに聖王の啓示を与え、以降の事績を目の当たりにする展開と解釈できる。この視覚接触ヴィジョンに続く善行は、いわばと身体接触による奇蹟と定義されよう。視覚および身体的接触は「奇蹟」発現の前提かつ要件であったことに留意したい。

以下、頁の見開きに番号を付して場面展開を簡略に述べる。

１．聖王ルイの墓に祈るジャンヌ、２．苦行の鞭打ちを受ける聖王ルイ（朝課fol.103）、続いて接触行為による癒しと奇蹟にたずさわる聖王ルイ、３．癩病の修道士に食物を与える（賛課fol.123v.）、４．病人に食物を与える（一時課fol.142v.）、５．貧者の足を洗う（三時課fol.148v.）、６．聖務日課書の奇蹟（六時課fol.154v.）(6)　７．十字軍兵士の遺骸を集める（九時課fol.159v.）（図４）、そして８．聖王ルイの死（晩課fol.165v.）（図１）へと続き、９．聖王ルイの遺骸の移葬（終課fol.173v.）をもって閉じる。

『フランス大年代記』にもとづく「６．聖務日課書の奇蹟」を除いて、概ねいくつかの聖王ルイに関する伝記に依拠する。たとえば、癩病者への治癒に関わる場面は、ドミニコ会修道士ギョーム・ド・シャルトルの『報告書』中「伝記（*Vita*）」に依拠するが、同書では癩病の修道士は目が潰れ、鼻が崩れ落ち、唇は裂けて荒

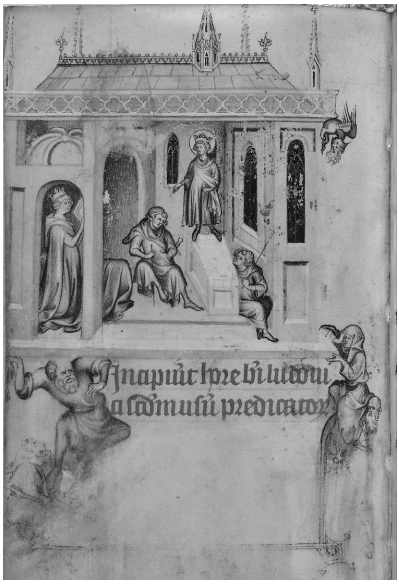


図３　聖王ルイの墓の前で祈るジャンヌ『ジャンヌ・デヴルーの時禱書』fol.102v.

図４　遺骨を拾うルイ王『ジャンヌ・デヴルーの時禱書』fol.159v.

れていたという。本時禱書の癩病修道士の癒しの場面では、ルイ９世が半身裸で床に伏す修道士の口に食物を運んでいるが、修道士には癩特有の症状は見られず、痩せこけて苦悩の表情を浮かべながら食物を飲み下している（図５）。

また、チュニスにおける臨終の場面は、前述したように、キリスト教中世における「善死」の手本とされたのであった（図１）。聖王ルイの遺骸の移葬は、フランシスコ会修道士ギョーム・ド・サン＝パテュスの『奇跡集』にもとづく。

ルイ９世が列聖された翌年1298年８月25日、王家の廟堂サン＝ドニ修道院聖堂に埋葬されていた遺骸を掘り起こし、祭壇上に置かれた聖遺物容器の中に安置したという(7)（図６）。王冠を頂き移葬を導く者はジャンヌの夫フィリップ４世ともジャンヌの父ともされる。８月25日は聖王ルイの祝日とされたのであった。

『ジャンヌ・デヴルーの時禱書』においてルイ９世の列聖に至る主要な場面が癒しと奇蹟に特化されていることは注目すべきである。さらに、「聖王ルイの時禱」に続く「悔悛詩篇」冒頭、すなわち同時禱書の最後の挿絵は「玉座に座すキリスト」（fol.182v）であるが、祝福の身ぶりのキリストの右側は、あたかも誰か座す者を待つかのように空いており、そこに聖王ルイが居並ぶことを想定しているようである（図７）。「聖王ルイの時禱」冒頭の復活のキリストのごとく墓石の上に

図５　癩病人に食物を施す聖王ルイ『ジャンヌ・デヴルーの時禱書』fol.142v.

図６　聖王ルイの遺骸の移葬 同上fol.173v.

図７　玉座のキリスト同上 fol.182v.

立つ聖王ルイの姿（図３）は、「悔悛詩篇」のこの挿絵と連動していると考えられるのである[8]。

以上概観したように、ルイ９世は内憂外患に対応し、キリスト教の美徳を体現した、寛大にして「アウラ」さえ発する「カリスマ的存在」であった[9]。死後17年目の1297年、当時の政治的宗教的要人多数の推挙を得て、時のローマ教皇ボニファティウス８世によって「超人」[10]として列聖され、いわばキリストに倣う聖人王として以降のフランス王国の礎となったのである。

２．王権の顕彰と神格化

２—１　聖王ルイの革新

前述したように聖王ルイについては『年代記』の他『聖王ルイの詩篇』（パリ、国立図書館所蔵写本ms.lat.10525、ライデン大学図書館所蔵写本BPL76A）など相応数の文書により知られ、イメージ資料も現存している。また多くの年代記写本が、聖王ルイの時代の記述を端緒として本格的編纂が始動したことは重要である。すなわち一連の史書は、聖王の名を頂いたルイ９世の顕彰化を意図していたと言っても過言ではない。そのためにまず遡ること、クローヴィスの受洗（図８）によって初めてキリスト教国家となったフランク王国メロヴィング朝の顕彰化を図り、ついで西ローマ帝国皇帝として戴冠し古代文化を復興させたカール大帝を

図８　クローヴィスの受洗『フランス大年代記』
パリ、国立図書館所蔵写本2813fol.12v.

筆頭とするカロリング朝へと遡及、それを継ぐカペー朝からヴァロワ朝を、栄誉あるローマ帝国の正統な後継者とすることを目論む公文書であった。「パリ写本2813」挿絵に見るように、クローヴィスはランス司教レミギウスによって洗礼の際に塗油され、その油は聖霊の白鳩が天からもたらした聖香油として聖油瓶に保存された。国王の塗油自体は、カロリング朝の始祖ピピン３世へのマインツ大司教ボニファティウスによる751年の塗油およびサン＝ドニ修道院における教皇ステファヌス２世による754年の塗油以降、フランス国王聖別式の中心的な儀式となる。中世キリスト教における典礼は旧約の伝統を踏襲しており、祈り、按手、塗油などの所作が継承展開されてゆくのである(11)。またクローヴィスは、サン＝ドニ修道院の創立発展に深く関与したため、後述するように以降イメージ戦略に大いに利用される。

ところで、ローマ帝国とユダヤの伝統を継承変革する過程で新たに浮上した顕彰化の要件は「美徳」、とくに最高の徳目とされた「謙遜」であり、それは国王顕彰化の変容を考える上で重要である。まさに善行と何より謙遜ぶりを発揮した聖王ルイの慈善と癒し、そして死と死後の奇蹟に焦点を当てることによって、キリスト教国家の表象の新たな時代が始まるのである。さらに続くカペー朝分枝ヴァロワ朝は、聖王ルイを血縁関係の礎としてつぎのパラダイムシフトをもたらした。すなわち、フランク人国家からフランス王国へと舵を切ったヴァロワ朝二代目ジャン２世善良王（1319～64年）、続く第三代国王シャルル５世賢明王は、イングランドとの百年戦争前半の苦境の中で年代記続編を編纂し、キリスト教国家フランスの顕彰化、さらには神格化に巧緻な理論武装による戦略をもって寄与したのである。

２―２　王権神格化の初期段階―カロリング朝からカペー朝へ

このパラダイムシフトを考察するに当たり、まずは、カロリングおよびオットー朝の顕彰化について確認しておきたい。472年に実質上滅亡した西ローマ帝国の復興を図ったカロリング朝における王権の神格化は、カール大帝の戴冠に象徴されるように、ローマ教皇庁とビザンティン（東ローマ）帝国にとっても重要な課題であった。権力の顕彰はローマ皇帝イメージの借用に負うところが多く、そのイメージ形成の端緒をなすのは大帝の息子シャルル敬虔王であろう。「カロリング・ルネサンス」の時代、敬虔王の周囲には、カール大帝によって培われた知的伝統があった。紀元前３世紀のマケドニアの詩人アラトス著の教訓詩『現象』（Phaenomea）のゲルマニクス訳写本を所有していたことが知られ、さらに古代末期の354年、ローマの裕福なキリスト教貴族ウァレリアヌスに贈呈された『Chronography of 354』（Romanus1.ms.Barb.lat.Vatican）が伝わっていた(12)。同年表の挿絵中「施しをするコンスタンティウス帝図」の基本構図は、敬虔王の息子シャルル禿頭王の顕彰に用いられ、写本を介した古代ローマ伝統の継承と借

用がイメージ形成において重要であったと判断できる（図９、10）。

アルコソリウムの下に座すコンスタンティウス像を踏襲したシャルル禿頭王は玉座に座し、右手に王笏を左手で天球を手にし、その頭部には神の手が差し出されて王冠を授けている。因みに天球を表象する球体には、二つの半円形の中央に十字架が表わされ、これをフランス王家の紋章「フルール・ド・リス」の祖型とする説もあるが断定は難しい[13]。

一方、イスラエル王国の建国者にして信仰と敬虔の美徳で称えられたダヴィデは、古代末期以来、理想的君主の鑑とされてきた。本挿絵では、動勢に富む姿で描かれており、神を賛美するその舞踏は霊的な踊りとして特権的イメージとなっている。たとえば先の『シャルル禿頭王の詩篇』（842～869年）は、挿絵を三点のみ含むが、内一点は竪琴を奏でるダヴィデを描写し（図11）、同時期の『ヴィヴィアンの聖書』では、シャルル禿頭王は先の加冠の着座像とは異なり、竪琴を奏でる身ぶり豊かなダヴィデとして表現されている（図12）。ローマ文化を受容した同時期は、一方で典礼の確立期でもあり、異教古代的伝統の手振りや身振りの変容が迫られていたことが指摘され[14]、表現性の高い手振り身振りの一方、権力を可視化するための不動性、謙遜の姿勢、祈りの体位の多様性も要請されてゆく。

第三代のシャルル禿頭王、ルートヴィヒ２世、ロタール１世によるヨーロッパ三分割後、西ローマ帝国を神聖ローマ帝国へと展開させたオットー朝は、きわめ

図９　施しをするコンスタンティウス帝『Chronography of　354』（part7）354年Romanus1.ms.Barb.lat.Vatican

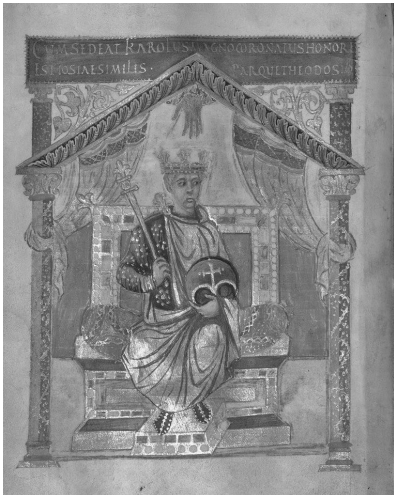


図10　玉座のシャルル禿頭王『シャルル禿頭王の詩篇』842～869年　パリ、国立図書館所蔵写本ms.lat.1152,fol.3

図11　ダヴィデ『シャルル禿頭王の詩篇』fol.1

図12　竪琴を奏でるダヴィデ『ヴィヴィアン聖書』パリ、国立図書館所蔵写本. 845年頃　パリ国立図書館所蔵写本ms. lat.1　fol.215v.

て重要な世俗権力（皇帝権）の確立期であった。オットー朝では動的イメージに加えて、正面性の強い不動の皇帝像が創出される。例えば『リウタールの福音書』（図13）では、オットー３世の頭上に神の手が直接王冠を授け、オットー３世自身、神を囲むはずの光輪マンドルラに囲まれている。下部を大地の擬人像（ガイア）が身を屈して支え、マンドルラの上部周囲には四福音書記者の象徴（獅子・牛・人・鷲）が布を持ち、その布はオットー３世の胸部と腹部以下を分けている[15]。下方には聖職者と廷臣が二名ずつ配されている。

そして王権の顕彰化のみならず塗油をはじめダヴィデとのダブル・イメージは以降、聖王ルイへと継承される。『君主鑑』伝統に加えて『詩篇』は、初代キリスト教時代からきわめて重視され、祈禱文の主体を成し典礼の形成には不可欠の文書であった[16]。とくにダヴィデの悔悛を記した箇所は「悔悛詩篇」として「聖務日課書」中「死者聖務」の中核をなす祈禱文であり、建国者にして悔悛の美徳の誉れ高いダヴィデ・イメージ借用の論拠のひとつであった。

しかし、同時期の君主顕彰イメージには癒しと奇蹟の例はない。すなわち、癒しと奇蹟の美徳によって顕彰される最初の国王はルイ９世、すなわち聖王ルイを嚆矢とみなされる。この顕彰化の変化は、多分に12世紀における修道院改革運動、前述したようにルイ９世も大いに寄与した托鉢修道会にして説教修道会、フランシスコ会とドミニコ会の躍進にある。両修道会は、修道院神学から世俗世界へと

図13　神格化されるオットー『リウタールの福音書』挿絵
1000年頃　アーヘン宮廷礼拝堂図書館所蔵写本fol.16

門戸を開いたのみならず、善行勧告と何より死者のための聖務日課の充実を計り、中世後期を牽引する修道会であった。

３．癒しの奇蹟のイメージ形成

３―１　治癒者キリストとのアナロジー

では、いかに国家権力の表象を癒しと奇跡というキリスト教の美徳と融合させたのであろうか。死者のための聖務を敷衍した説教修道会の貢献は重要であるが、それを反映するルイ９世の事績の中でも奇蹟的治癒能力「ロイヤル・タッチ」、すなわち「瘰癧治療」が王権の存続基盤となったことに着目したい。それは古代ローマ帝国の遺産および旧約世界の継承のイメージ戦略から、キリスト教国家としてのイメージ戦略への転換であり、中世イメージ研究における大きな分岐点をなすとも言える。そして国王のイメージを治癒神キリストのアナロジーとして確立する経緯には、十字軍によってもたらされた数々の聖遺物と崇敬が関与していたと考えられる。キリストの聖遺物を所有し、それを国王自身と国家のアイデンティティとすることが新たな王権顕彰として浮上したのである。

聖王ルイがこのパラダイムシフトに果たした役割を検討するに当たっては、聖

王の奇蹟治癒の内でも「ロイヤル・タッチ（王の病King's evil）」はきわめて特殊である。通常、奇蹟とは、まやかしを避けるためインノケンティウス３世（1161～1216年）の規定以降、基本的には「死後」とされていたからである。聖王の死後の奇蹟の報告は65件を数え、すべて死後における身体的疾患の治癒である[17]。それらは、現存する写本挿絵を検討する限り、ほぼ視覚接触と身体接触による癒しに分類される。すなわちサン＝ドニ修道院の聖王ルイ像を前にして治癒される、あるいは聖王ルイが近づいて触れて治癒する場合である。死後の奇蹟をいかに確証するかは、我々からすると疑念であるものの、奇蹟の創出こそが聖人の要件であった。

しかし、聖王ルイには生前の奇蹟が伝えられている。先の「聖務日課書の奇蹟」と「ロイヤル・タッチ」である。中世を通じてもっとも忌むべき病のひとつ瘰癧[18]は、癩病、黒死病、麦角中毒などと同様、皮膚疾患に伴う変貌が驚異の対象となったが、その患者の患部に手を触れて癒す治癒能力を有すると記録されている[19]。

この治癒能力を有した国王は、イングランドのエドワード懺悔王とその類縁、そしてルイ９世に至る王の数人に限られ、とくにフランスにおいては以降、ブルボン朝ルイ14世に至るまで、国王の接触治癒能力が継承されることになる。すなわち、王権の神格化において、この「ロイヤル・タッチ」という特殊な治癒力は、民間伝承にも依拠するが、生前に発揮される希有な能力であったと言えよう。治癒神キリストの伝統とその医学的意味については紙面の都合上詳述しないが、それは必然的にキリストの癒しの奇蹟と結びついている。二本の指を患者ないしは患部にかざすキリストは治癒神の典型像であるが、必ずしも祝福のポーズのみが「癒し」の所作として表現されていたわけではなく、患部への接触も医療の実践と同じく宗教における癒しを表象し、かつ塗油による聖別と密接に関連している。元より手は、「力（Virtus）」の隠喩として捉えられていたからである。

３―２　聖王ルイの奇跡治療に関する記録

ルイ９世が聖王となるための奇蹟として特筆すべき瘰癧治療の実際について考察するにあたり、改めて以下、ルイ９世の生涯についての記録を確認する。ドミニコ会修道士にしてルイ９世に20年ほど寄り添い、聴罪司祭を務めてチュニスまで同行して王の最期を看取ったジョフロワ・ド・ボーリュー（Geoffroy de Beaulieu）、ついでジョフロワの代役を務め、王の側近であった同じくドミニコ会修道士にして聖人伝作者ギョーム・ド・シャルトル（Guillaume de Chartres）、そしてフランシスコ会修道士ギョーム・ド・サン＝パテュス（Guillaume de Saint-Pathus）であり、サン＝パテュスはルイ９世の王妃マルグリットの聴罪司祭を務めた[21]。修道院刷新に始まる托鉢修道会の活動がめざましかった当時、ルイ９世は、両托鉢修道会の伝道布教と慈善、さらに改悛と謙遜の必要性を自身も熱心に実践した国王であった。また、サン＝ドニ修道院修道士にして文書官

ギョーム・ド・ナンジ（Guillaume de Nangis1300年没）も『年代記』および『聖王ルイとその兄弟およびフィリップ３世とロベールの生涯』を残している。ギョーム・ド・ナンジは、サン＝ドニ修道院が俗語史書の作成に着手した時の主導者であった[22]。さらにルイ９世の忠信の直臣であったシャンパーニュ伯領セネシャル、ジャン・ド・ジョワンヴィル（Jean de Joinville1227～1317年）も時系列に君主の生涯と事績を詳らかに記し、史実にもとづく聖王ルイ伝となっている[23]。

ルイ９世の瘰癧患者の奇跡的治癒能力についての記述は散見されるものの、同王の「ロイヤル・タッチ」のイメージ資料としては大英図書館所蔵写本（Ms. Royal16GVI.fol.424v.以下「ロンドン写本16GVI」と表記）挿絵のみである[24]（図14）。ここにおいて聖王ルイは、瘰癧患者の顎に右手を触れ、それとクロスするように左手をかざしている。この十字形をかたどった身ぶりには、まず古代教会からの伝統があった。つまり按手と並んで「十字を切る」のは聖別と祝福のしるしであり、２世紀には教父テルトゥリアヌスが言及し[25]、アウグスティヌス（354～430年）によって聖礼典に不可欠であると言明され[26]、中世教会に普及していた。とりわけ教皇インノケンティウス３世となった枢機卿ロタリオは十字の印について詳述し、この典礼刷新期に大きな影響を与えた[27]。

もう一人の聖人王エドワード懺悔王の『生涯』に、より早期の瘰癧治療挿絵が存在する（図15）。年代記者マシュー・パリス（Matthew Paris 1200-59年頃）『大年代記』挿絵ではエドワードは右手を伸ばして患部に触れている。絵師の名は不

図14　聖王ルイのロイヤル・タッチ『フランス大年代記』挿絵　1332～50年　ロンドン　大英図書館所蔵写本 Royal16GVI,fol.424v.

図15　エドワード懺悔王のロイヤル・タッチ『エドワード懺悔王の生涯』挿絵　1230後期～1240年代初め　Cambridge University Library MS Ee.3.59 fol.48

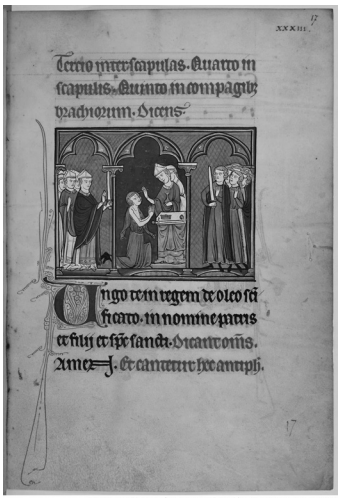
明であるが、様式的特徴から13世紀イングランド、おそらくロンドンでの制作と考えられる[28]。とは言え、聖王の両腕を交差する特殊な描写は他には類例がない。ついで聖王ルイの事績の内、とくに治癒に関するイメージ形成について検討する。

３―３「瘰癧治療者」としての聖王

聖王ルイの事績を子細に綴った『1250年の儀典書』（パリ　国立図書館所蔵写本ms.lat.1246）[29]では、15点の彩飾挿絵が施され、塗油、戴冠、列聖への過程が詳らかに描写されており、何より塗油が、正義の剣の奉献、ついで戴冠、さらに列聖されるために必要不可欠な儀式であると分かる（図16）。しかし、『1250年の儀典書』には、聖王ルイの「癒しの奇蹟」は描かれていない。

一方「パリ写本2813」では、キリスト教王家を開いたフランク王国メロヴィング朝始祖クローヴィス（466－511年）に始まる神権政治のイメージが丹念に辿られている。しかし、この重要な年代記においても聖王ルイの死後および生前の奇蹟治療については描写されていない。そこで、聖別されたルイ９世の先代にはない特殊な治癒能力に関する史料から検討しよう。

聖王ルイが接触によって瘰癧患者を治癒した記録については、「ロイヤル・タッチ」の歴史の基盤となる史料がある。たとえば「聖ルイはおそらく連日、少なくとも患者が出頭して懇願すればいつでも朕の病人に触れた模様」とされるが、ミ



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France. Département des Manuscrits, Latin 1246

図16　聖王ルイの塗油『1250年の儀典書』挿絵、1250年　パリ　国立図書館所蔵写本ms.lat.1246fol.17

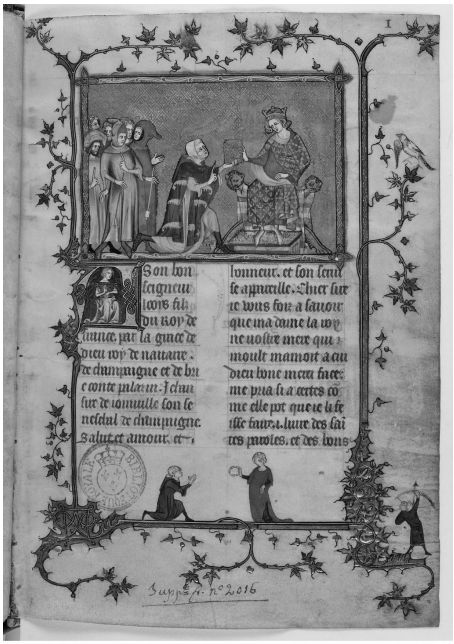
サの後の一定時刻に限られており、遅れて参じた者は宮殿の一隅で夜を過ごし、彼らのために寝床と食物が用意されたという[30]。また、ジョフロワ・ド・ボーリューは、聖王ルイは患部に触れながら「その場にふさわしく、慣習によって定められた、かつ完璧に神聖かつカトリック的なる」言葉を口にし、さらに患部に十字を切ったと伝える[31]。その名声は各地に広まり、シエナ近郊モンタセンティの住人ランフランキーノは瘰癧を病み、1258年にフランスに向かったという[32]。

接触治癒の歴史を詳細に論述したブロック著『王の奇跡』では、この接触による治癒能力はメロヴィング朝宮宰にしてカロリング朝創始者ピピンに遡り、以降、空白の期間はあるものの、ロベール家に始まるルイ９世を生んだカペー朝まで随時継承されたとし、聖王ルイによる病人の治癒をもって初めて「王の奇蹟」がフランス王家に確立したとする[33]。

さて「ロンドン写本16GVI」は、ヴァロワ朝時代に制作（1332年以降から1335年）され、クローヴィスから1270年、すなわちルイ９世の列聖までを叙述対象としている。同写本はヴァロワ朝創始者フィリップ６世の息子ノルマンディー公ジャン、のちのジャン２世善良王（1319〜1364年）による注文とされ、絵師は『ジャンヌ・デヴルーの時禱書』挿絵を描いたピュッセルの工房で活動していた「聖王ルイの画家」（あるいはMahiet）[34]とされる。

「聖王ルイの画家（以下Mahietとする）」が描いたとされる挿絵を閲覧できる限り検討すると、簡略化され硬質ながらも表情のある描線を特色とする。洗練度においてはピュッセルに劣るが、たとえば、その名の由来となった聖王ルイについては「Mahiet」が携わった４冊の写本が現存し、ジョワンヴィル著『聖王ルイの生涯』写本挿絵に見るように、大きく開かれた掌による手振りの表現性が傑出している（図17）。その独特な手振り身振りはピュッセルにも通じるものの、より誇張された手振りに託された意味を検討することは重要であろう[35]。

パリは14世紀後期から15世紀前期にかけて写本制作の中心地であり、フランス王国と類縁にあたるイングランドや北スペイン、プロヴァンスおよびミラノなどの北イタリア、アンジュー支配下にあったナポリ、さらには神聖ローマ帝国の首都であったプラハなどヨーロッパ各地の需要と供給の中心をなし、写本挿絵師、画家、彫刻家、建築家の交流が活性化していた。いわゆる国際ゴシックの時代である。そのパリでは、メロヴィング朝ダゴベルトを開祖とするサン＝ドニ修道院を筆頭に、シテ島に近いセーヌ左岸、王家のサン＝ジェルマン修道院とソルボンヌ大学周辺に写本工房が存在し、つねに複数の写字生と絵師たちが作業を分担しながら制作していた。ちなみに、修道院写本室の充実が図られたカロリング朝においては、フランス国王戴冠の地ランス、ソワッソンのサン・メダール修道院、トゥールのサン・マルタン修道院などがレーゲンスブルク修道院らと競合して中世写本黄金時代を築いていた。



Source gallica.bnf.fr / Bibliothèque nationale de France, Département des Manuscrits, Français 13568

図17　聖王ルイに書を捧げるジャン・ド・ジョワンヴィル『聖王ルイの生涯』扉絵、1330～40年　パリ　国立図書館所蔵写本ms.fr.13586 fol.1

3―5　癒しの身振り

「Mahiet」の挿絵において特に注目に値するのは、瘰癧患者の顎に触れる聖王ルイの右手と肘を折った左腕が交差し、十字形を象っていることである。実際、聖王ルイが患部に触れた後、十字を切ったと伝えられていることは前述したが、キリストが癒しの奇蹟をおこなう際の祝福のポーズや按手に類した接触をとる場合が多い中で、カロリング朝の重要な写本のひとつ『シュトゥトガルト詩篇』に関連する素描（図18）では、城壁に囲まれた城館の前庭で、キリストが右手をレプラ患者の顎に当て、左手で十字架を持つ姿が描かれている。

『シュトゥットガルト詩篇』は、おそらくサン＝ジェルマン修道院で制作され、100点以上の挿絵を有する稀有な写本ながらほぼ1000年に渡り所在不明であったため、その様式の伝搬に関する詳細な研究は難しい。しかし、表情豊かな人物描写と多彩な賦彩、とりわけ大きな手による表現性に富む身振り手振りは、後世の写本挿絵の系譜を見極める貴重な特徴と考えられる。『シュトゥットガルト詩篇』は詩篇であるためダヴィデが繰り返し描かれ、表現性に富む大きな手が特徴と

図18　癩患者を癒やすキリスト　デュッセルドルフ素描　９世紀　デュッセルドルフ大学図書館所蔵写本Ms.B.113.fol.51

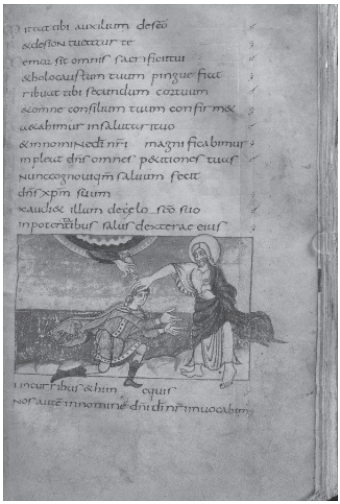


図19　塗油『シュトゥットガルト詩篇』挿絵　９世紀　ヴォルヘンビュッテル州立図書館所蔵写本Cod.bibl.fol.23v.

なっている（図19）[36]。

４．アナロジーによる歴史構築

４―１　ダヴィデのアナロジー

ダヴィデと国王とのアナロジーは、聖王ルイにも通じる。とくに『聖王ルイの詩篇』では、自身をダヴィデに喩えたイメージも存在する。「水浴のバテシバ見初めるダヴィデ王」の下部に、キリストに悔悛の祈りを捧げるダヴィデを配しているが（図20）、フランス王家の紋章「フルール・ド・リス」を配した背景を有しており、自らをダヴィデに喩えた聖王ルイのイメージが認められるのである[37]。

ダヴィデとしての聖王ルイについては、年代記者らが聖人伝および典礼における聖王の記述によって確立していったことが史料に基づいて明らかにされており、以下、簡略に述べておく。

まずはユダヤ聖典と、初期キリスト教時代以来つねに緊張関係を続けてきたビザンティン帝国の事績に依拠する歴史編纂である。茨冠など貴重な聖遺物をコンスタンティノープルからパリへ運ばせた聖王ルイは、モーセが神から授けられた十戒を納めた契約櫃をエルサレムに戻したダヴィデに喩えられるのみならず、聖十字架と受難の諸道具をササーン朝ペルシアから奪回してエルサレムへと返還し

図20　バテシバを見初めるダヴィデ、神に祈るダヴィデ『聖王ルイの詩篇』挿絵　1274年頃　パリ　国立図書館所蔵写本ms.lat.10525,fol.85v.

図21　聖遺物を授与される聖王ルイ　『フランス年代記』BL,Royal 16GVI,fol.395

たビザンティン帝国皇帝ヘラクリオスに喩えられるとする王権の正統性に関するアナロジーである。

ついで、ダヴィデとヘラクリオスの事績に基づく典礼では、とくに1300年頃成立した読誦（Lectionary）において、パリを第二のエルサレムに喩える詩句が唱えられ、『聖王ルイの祝日』に聖王ルイは以下のように称えられている。

「ルイは神的奇蹟によって称えられん；ダヴィデはソロモンの厳正とエゼキエルの真実と共に称えられん；我らすべての目にはヨシュアは慈悲深さゆえに称え

られん；彼の民にとっての神聖なる者よ；栄光の誉れは汝に降り注ぐ」(38)。

他の年代記と同様、ギョーム・ド・ナンジ『聖王ルイの生涯』に後半部を依拠している「ロンドンRoyal 16GVI」には、『生涯』に記されるごとく、質素な修道服をまとった素足のルイが厳かにコンスタンティノープルからの聖遺物、茨冠、十字架など受難の諸道具を授与されている（図21）。聖王ルイの顕彰化には、イスラエル建国の祖であり、かつ契約櫃の返還によって称えられたダヴィデ、さらにはヘラクリオスとのアナロジーが効果的に適用されたのである。

4—2　第二のエルイサレムーサント・シャペルと聖遺物

自らをキリストに、さらに大イエスラエルを建国したダヴィデに喩えた聖王ルイは、のみならず、パリを第二のエルサレムにしようと意図しており、その偉業を明確に体現したのがサント＝シャペルであった。

ルイ９世は、第７回十字軍が宣布された1239年、コンスタンティノープルのラテン帝国皇帝ボードワン２世に３万５千リーヴルもの大金を支払ってキリスト受難の重要な聖遺物である茨冠を購入し、これを納めるべくサント＝シャペル（1243～48年）の造営に取りかかる。当時のフランス国家予算の半額以上である13万ルーヴルを投じたこの王室礼拝堂には、1241年にさらに聖十字架の断片、キリストの聖血、墓石、そして洗礼者ヨハネの頭蓋骨の一部や聖具など計22個の聖遺物が集められた（図22）。サント＝シャペルには15枚のランセット型ステンドグラスと薔薇窓がはめ込まれ、旧約聖書の諸場面を主体にキリスト幼児伝、受難伝、聖遺

図22　サント＝シャペルの聖遺物『ベッドフォード公のミサ典書』挿絵　1424-32年　fol.83v.1837年の模写

物の歴史がステンドグラスによって語られ、さながらそれ自体が聖遺物容器のごとく燦然と高貴な輝きを放っていたのである[39]。

４―３　15世紀におけるフランス神聖化のイメージ確立

新しいエルサレム＝パリによるフランス王家の神聖化は、『大年代記』が集中的に制作されたヴァロワ朝シャルル５世賢明王から至る百年戦争終結へと至る時期にさらに理論武装して確立する。王権の神聖化に邁進していた当時、たとえば、ラウル・ド・プレール（Raoul de Presles、1316～82年）訳アウグスティヌス『神の国』挿絵（図23）では、画面左下部でアウグスティヌスが「神の国」講話を行い、緑野の右方にはパリの景観が広がる。聖王ルイの聖遺物を収めるサント＝シャペルを中央に配したこの聖都パリを背景に、フランス王国の表象が配置されている。まず左袖に「CLOVIS」と刺繍された王が、右上方から、天使が青地に三つの黄金のフルール・ド・リスをあしらった紋章を捧げるのを見上げている。中央にはオリフラーム（赤色軍記）が屹立し、その右上方には白鳩がかの聖油瓶を加

図23　アウグスティヌス『神の国』ラウル・ド・プレール訳1445年頃、ブリュッセル王立図書館所蔵写本ms.9015,fol.1

えて舞い、右側には国王を象徴する鷲が太陽を見つめながら舞い上がっている。

ラウルは、シャルル５世賢明王の顧問を務めた神学者にして法学者、翻訳家でもあり、シャルル５世治世を理論的に牽引した「人文主義者」の一人であった。とくにアウグスティヌス『神の国』仏語訳は現存59写本を数え、その影響力が伺える(40)。ラウルのみならず、シャルル５世の同じく顧問には神学者にして哲学者、天文学と数学、音楽などを修め、アリストテレス『倫理学』を仏訳したニコラ・オレーム（Nicolas Oresme）らもおり、彼ら「知識人」は13世紀スコラ哲学の伝統を継承しつつ、新たなフランス国家論の構築に寄与したのである。

そしてこの知的環境を牽引したシャルル５世賢明王こそ、フランス王家の紋章を青地に三つの「フルール・ド・リス」に制定した国王であった。1377年２月12日、マント近郊リメイに創設されたセレスタン会トリニテ（三位一体）修道院への勅令前文において、シャルル５世は、三つの百合の理由を次のように記している。以下抄訳する。

「フランス王国のシンボルたるles lysは、百合の花々を咲き誇らせる。三つは三位一体を示す。すなわち、父なる神と御言葉（ロゴス）である子と聖霊が三つの異なるペルソナにしてその本質は同一であるように、三つの花は神秘的に単一のしるしを予示する。神の太陽が帝国の高みから全世界をあまねく照らすように、三つの黄金の花は、天上の蒼穹の野辺に配されて、栄光に満ちた輝きを地上に放ち、まばゆいきらめきで眩惑させる。このしるしは、三つの徳目、すなわち三位一体の父なる神、御言葉たる子、聖霊のそれぞれに属する全能、叡智、善良をも示す。軍力、学問、寛容性は完全に三つの花の集まりに対応し、フランス王国は、今日に至るまで他の国々より抜きん出て輝きわたる。偉大なる良き意思を国王に顕示された不可分の三位一体と相対する国王の威厳はかくのごとく、その意思を授けられし国王は自身のイメージを三位一体に捧げる。ゆえに国王は、地上のいかなる権威にも従属することなく、恵み深い特権的な保護の元に自らを置く」(41)。

ここに高らかに宣言された三位一体としての三つの百合の表象は、実はクローヴィスに遡る。シャルル５世治世下で『王旗論』執筆やアウグスティヌス『神の国』翻訳を介して王権擁護に大きく寄与したラウルによると、クローヴィスは、黄金の三日月を散りばめた陣羽織をまとっており、これを「フルール・ド・リス」に換えることで勝利してランスにて改宗、洗礼を受けたとの伝承を伝えている(42)。ここにコンスタンティヌス帝のマクセンティウス帝に対する勝利を読み取るのは容易であろう。実際、クローヴィスの受洗について記録したトゥールのグレゴリウスはクローヴィスを「新しいコンスタンティスヌ」と記していた(43)。ユダヤ伝統継承の一方で、古代ローマ皇帝からビザンティン皇帝へ、その権威の表象はイメージと言語によって継承されているのである。

さらに、シャルル５世の庇護を受けた音楽家にして理論家フィリップ・ド・ヴィトリ（Philippe de Vitry　1291-1361年）は、「フルール・ド・リス」の特性につ

いて次のように記す。

「フルール・ド・リスはこの世のいかなる花も及ばないほど咲き誇り（Croist）、生まれながらの気高さによって身を飾る　美しく純粋にして芳しく　甘美にして薬用の花　この花を紋章にもつ者は、この花に似て、死すべからざるもの」(44)。

「咲き誇る」の原語はラテン語crescuntを祖型とし、この語から生じた三日月は、古来、多産と豊穣のシンボルであった。クローヴィスに始まるフランス王家の正統性は、紋章によっても保証されたのである。

クローヴィスの顕彰化と伝統を描いた『ベッドフォード公と公妃の時禱書』は、15世紀前半のパリ写本を牽引した「ベッドフォード公の画家」による挿絵（1429年頃）で名高く、異時同図的に配置されたクローヴィスの事績である（図24）。画面右上では咲き誇る百合の花のごとき日輪に父なる神が顕れ、天使に青地に黄金の三つの「フルール・ド・リス」を配した紋章を授ける。その左方では、妃クロティルドがジョワンヴィルの修道士からそれを受け取り、さらに右下の宮殿で鎧に身を固めたクローヴィスが妻から紋章を受け取っている。さらに、ラウル訳

図24　「クローヴィス伝とフルール・ド・リスの起源」『ベッドフォード公夫妻の時禱書』挿絵 1429年？ロンドン、大英図書館所蔵写本、Add.MS.18850　fol.288v.

アウグスティヌス『神の国』の別写本（1480年頃）の扉絵には、クローヴィス伝の仔細と受洗と塗油および「ロイヤル・タッチ」を同場面に配した写本挿絵が描かれるに至る（図25）[45]。フランスの始祖としてのイメージを確立し,さらに「ロイヤル・タッチ」の奇蹟能力をも付与されることは、聖王ルイ時代以降のクローヴィス評価の結果であろう。

おわりに

本稿では、聖王ルイを中心にフランスの王権確立と神聖化への道程を辿った。西ローマ帝国の継承者としてのカロリング朝オットー朝においては、古代イメージを用いた神権が前景化していたが、聖王ルイの時代に美徳と癒しの奇蹟を加えることでキリスト教国家としての威信を確立していったと見なしうる。奇蹟と聖遺物の重視は中世後期へのパラダイムシフトの基軸となったと言えよう。

図25　クローヴィスの事績、受洗と瘰癧治療『神の国』挿絵、1480頃マコン　市立図書館所蔵写本、ms.0001 fol.1

註

（1）聖王ルイに関する浩瀚な基本書はジャック・ル・ゴフ『聖王ルイ』岡崎敦・森本英夫・堀田郷弘、新評論、2001年。臨終については以下で扱った。小池「死の中世―臨終の光景」『未来のなかの中世』草光俊雄/小林康夫［編］東京大学出版会、1997年。とくにpp.85～86。チュニスでの死後、死体を三分割埋葬したと伝えられるが確証はない。しかし11世紀以降、とくにドイツ圏で分割埋葬（Mos Teutonics　チュートン人の埋葬方法）が始まり、第２回十字軍以降、遠隔地で死亡した要人の遺体を心臓、内臓、残余の遺骸に分割する慣習がイングランドとフランスにも普及。エンバーミングとデスマスクの成立と密接に関係する。以下は本稿の構成にも関わる研究書。エルンスト・カントーロヴィチ（1895～1963年）『王の二つの身体ー中世政治神学研究』小林公訳　平凡社、1992年。本書は王権における権力構造の変遷を辿り、中世から近世にかけて国王二体論が導かれる過程を分析している。

（2）ゴフ、同書。pp.420～441とくに423-424。俗語史書の成立も含め、「年代記」の変遷については以下を参照した。鈴木道也「中世後期フランスに於ける歴史記述の俗語化について」『東洋大学文学部紀要』史学科篇、2014年。pp.180～152。

（3）個々の写本については所蔵図書館が公開している限りデジタルデータを閲覧できる。註においては閲覧した写本の情報を記載する。美術史の観点も含めて最も重要な包括的研究は以下。Anne D.Hedeman,*The Royal Image：Illustrations of the Grandes Chroniques de France, 127-1422*,Berkley,University of California Press,1991.
「パリ写本2813」についてはhttps://archivesetmanuscrits.bnf.fr › ark:/12148/cc780378

（4）『ジャンヌ・デヴルーの時祷書』については研究の蓄積がある。本稿では緊密に関係する文献のみを記載する。本時祷書は、背景と皮膚に色彩を施す他は、ほぼグリザイユ技法で丹念な挿絵が施され、無彩色に近い性質上、聖王ルイを忍ぶか、あるいは夫シャルル４世の存命を祈願してのジャンヌの依頼であった可能性はある。ピュッセルに帰属されることに異論はない。イタリア旅行を果たした14世紀パリの絵師の筆頭とされたピュッセルは、シエナ派創始者ドゥッチョの影響を受けた。壁画や板絵を専らとした当時のイタリア的空間表現と人物表現を写本挿絵に導入した画家。

（5）「聖務日課書」は日々の定時課の祈りや祝祭日に必要な多くの朗読テクストと祈禱文を簡略化して収録。ローマ教皇庁の聖務者のために編纂。朝課、三時課（午前９時）、六時課（正午）、九時課（午後３時）など定時課の祈りの習慣自体は初代キリスト教に遡り、６世紀、ベネディクトゥスにより修道院制が整えられて以降、1230年にはフランシスコ会の影響のもと、聖職者や修道士のみならず世俗の支配者も使用した。時禱書は、広くは詩篇本や聖務日課書を含み世俗の王侯貴族によって専ら用いられた。

（6）「聖務日課書の奇蹟」とは、ルイ９世が第７回十字軍遠征中、ダミエッタの攻防において自身の聖務日課書を失ってしまうが、サラセン軍に捉えられたのち、その喪失を悔やんでいたところ聖務日課書が白鳩によって戻された奇蹟。白鳩は聖霊を表象し、神の恩寵を示す。

（7）Guillaume de Saint-Pathus,*Les Miracles de Saints Louis*,Ed.H.-F.Delaborde,pp.171-174. https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b8447303m.image（2022年７月30日閲覧）

（8）玉座のキリストの左脇が空いている指摘は、すでに以下で指摘されている。古本高樹「ジャン・ピュッセル作『ジャンヌ・デヴルーの時禱書』研究」学習院大学人文科学研究科哲学専攻修士論文、2000年。

（9）ゴフ、前掲書。p.1046。霊気との「訳語」。また聖王ルイについては相応の研究の蓄積があるが、ここでは以下の展覧会カタログを挙げておく。Pierre-Yves Le Pogm,Christine Vivet,*Exposition Saint Louis*（du 8 octobre2014 au 11 janvier 2015,à la conciergerie à Paris）. Edition du Patrimoine,Centre des Monuments Nationaux,Paris.2014.

(10) ゴフ、同書。p.1046。超人*superhomo*。
(11) ジャン＝クロード・シュミット『中世の身ぶり』村松剛訳、みすず書房、1996年。典礼に関してはpp.115-118。
(12)『Chronography 358』に関しても多くの論文があるが、主に以下を参照した。Burgess, R. W. "The Chronograph of 354：its Manuscripts, Contents, and History", *Journal of Late Antiquity 5*（2012）345–396.Burgess, R. W. "The New Edition of the Chronograph of 354：A Detailed Critique", *Zeitschrift für Antikes Christentum* 21（2017）：383-415.Weitzmann, Kurt, ed., *Age of spirituality：late antique and early Christian art, third to seventh century*, no. 67, pp. 78-79, 1979. Metropolitan Museum of Art, New York,（full text available online from The Metropolitan Museum of Art Libraries.TheChronography of 354）.
(13) フルール・ド・リスの起源と形成については以下を参照した。Anne Lombard-Jourdan, *Fleur de lis et Oriflamme.Signes céleste du Royaume de France*, Presse du CNRS,Paris, 1991.本稿でも採録した小池論考にまとめた。「フルール・ド・リ（百合の花） パリのいにしえの物語２」『IS』77、ポーラ文化研究所、1997年。pp.58-67。（同書では「リ」と表記）
(14) シュミット、前掲書。特にpp.81～92。
(15) この挿絵についての詳細な解釈は以下を参照。カントーロヴィチ、前掲書。pp.88～103。シュミット、同書。p.121。
(16) 150編中73の詩篇がダヴィデの名を表題とするためにダヴィデ作とする説は否定されているものの、とくに聖務日課書の主要な構成内容であり、悔悛詩篇と呼ばれる７編（６、32、38、51、102、130、143章）は、死者のための聖務日課に不可欠。小池「死者のための聖務日課にみる死の光景」『音楽芸術　特集Iレクイエムを読む』、音楽の友社、1998年11月号。pp.35-42。
(17) ゴフ、前掲書。p.1075。
(18) 頸部リンパ腺炎　皮膚と顔貌の変容、悪臭などによって恐れられ忌み嫌われた病のひとつ。
(19) ロイヤル・タッチ（Royal touch）と称される瘰癧治癒の創始者たるフランスの国王はフィリップ３世。「ロイヤル・タッチ」についての詳細は以下が基本文献。マルク・ブロック『王の奇跡　王権の超自然的性格に関する研究/とくにフランスとイギリスの場合』井上泰男・渡邊昌美訳、刀水書房。1998年。
(20) 二本指をかざす所作は、古代ローマの修辞学者クィンティリアヌスによる弁論時の説得のための所作にもとづいている。癒しの所作については以下にまとめた。小池寿子「第４章手」『描かれた身体』青土社、2002年。とくに４章「治癒の神―アスクレピアダイ、治癒から奇跡へ、奇跡の手と祝福の手」、pp.209～229。
(21) 彼ら年代記者の概説についてはゴフ、前掲書。pp.398-418。
(22) 鈴木道也「中世フランス後期における歴史記述の俗語化について」『東洋大学文学部紀要』史学科篇、2014年、40号。pp.180-152。他同著者による論文。
(23)『聖王ルイー十字軍とモンゴル帝国』伊藤敏樹訳　ちくま学芸文庫、2006年。
(24) ロンドン写本については以下を参照。Hedeman　op.cit.,pp.51-73, pp.213-221. https://www.bl.uk/catalogues/illuminatedmanuscripts/TourHistoryVernac.asp#FRANCE（2022年７月29日閲覧）
(25) テルトゥリアヌスの記述（*De Corona Militis*）については以下を参照した。https://www.bing.com/ck/a?!&&p＝d61e3a5262390b3fJmltdHM9MTY1OTU5MjQ2OSZpZ3VpZD1mZTliOWY2My03NTQyLTQ0MTgtYTEwZi05YjkzMTdiYWRhMTQmaW5zaWQ9NTE3NA&ptn＝3&hsh＝3&fclid＝e763efd2-13b9-11ed-b847-60725b801372&u＝a1aHR0cHM6Ly93d3cudGVydHVsbGlhbi5vcmcvd29ya3MvZGVfY29yb25hLmh0bQ&ntb＝1（2022年７月29日閲覧）

(26) アウグスティヌス『ヨハネによる福音書講話』19巻24。テルトゥリアヌスとアウグスティヌス共に、額（前頭）での十字のしるしについて述べている。
(27) シュミット、前掲書。pp.341-344。
(28) ブロックは、瘰癧さわりの図像資料として17点挙げているが、16点は後世の図像。唯一、エドワード懺悔王による瘰癧さわりは聖王ルイの挿絵より以前。Crawfurd,Raymond Henry Payne,*The King's evil*,1911.p.52.https://wellcomecollection.org/works/eqde86rr.（2022年７月31日閲覧）エドワード懺悔王に関しては特に以下を参照した。Paul Binski, *Westminster Abbey and the Plantagenets,Kingship and the Representation of Power1200-1400*.Yale University Press,New Haven and London,1995. エドワード懺悔王と聖王ルイの「ロイヤル・タッチ」の比較検討については今後の課題としたい。
(29) *Ordo ad coronandum regem et reginam Francorum*. http:/archivesetmanuscrits.bnf.fr.　ゴフ、前掲書。pp.1048～1050。ゴフは挿絵を18点としているが、国立図書館のデータでは17点のみ。現在、欧米の図書館所蔵写本の多くは公開されており、とくにフランス国立図書館と中世写本サイトArlima、さらに大英図書館、アメリカではポール・ゲッティやメトロポリタン美術館などは十全な情報を提供している。本稿もこれらのデジタルデータに依拠している。塗油の部位については、頭部（前頭）、胸、両肩の間、両肩、腕の付け根、両手とされ、身体すべてが力で満ちるとされる。
(30) ブロック、前掲書。p.96。
(31) ブロック、同書。p.94。
(32) ゴフ、前掲書。p.1054、註8。Odile Redon,Il progetto Montarrenti, *Archeologia medievale*,XIV, 1987,pp.390-393。また、ブロックは以下の資料を挙げる。カロリング朝の貴重な資料トゥール司教グレゴリウス著『フランク人の歴史』（第９巻　邦訳『フランク史―十巻の歴史』杉本正俊訳　新評論　2007年。p.468）のメロヴィング朝クロタール伝では、ある女の息子が四日熱（カルテール）にかかり病床で呻吟していたが、女はひそかに王のマントの裾を破り取り、それを浸した水を息子に飲ませたところ回復。また王から発する霊力によって悪霊が見破られて己の罪を告白するのを目撃したという。さらに12世紀の傑出した年代記者、修道院長ノジャンのギベルトスは次の記録を残している。「我々は主君ルイ王が慣例の奇跡を行うのを見たではないか。顎やその他の箇所の瘰癧に苦しむ病人たちが、･･･王に触ってもらった上で十字の印をつけてもらおうと、群れを成して駆け寄るのを私は目撃した。･･･王の父フィリップも同じく神秘と栄光に満ちた能力を行使した。王がいかなる罪過を犯したためにその力を失なったか、私は何も知らない」。ブロック、前掲書。p.23。
(33) ゴフ、同書。pp.1053-1054。
(34)「カンブレのミサ典書の画家」、「Mathieu le Vassaseur」ともされる。いずれにせよバイユーを中心とする北西フランスの出身。『ベルヴィルの聖務日課書』支払書（1323-26年）に、ピュッセルからの支払いが記録されている。「Mahiet」については研究途上であるが、以下の基本論文を参照。Mie Kuroiwa,"Working with Jean Pucelle and His Successors：The Case of the Saint Louis Master（Mahiet？）"*Jean Pucelle：Innovation and Collaboration in Manuscript Painting*,Ed.by Kyunghee Pyun and D.Russakoff,Harvey Miller Pub., Brepols,2013.pp111-128.聖王ルイの画家（Mahiet？）が手がけた写本のリストはp.129（Appendix）。
(35) Mahiet　は『グアティアヌス教令集』の挿絵も３冊手がけており、同教令集との関係も今後の課題としたい。
(36)『シュトゥットガルト詩篇』と並んで重要な『ユトレヒト詩篇』は同様に表現性の高い線描画を有し、1000年頃イングランドに渡ってからは同地の写本にも多大な影響を与えた。両

写本とも古代ローマとビザンティン美術の影響が指摘されている。Koert der Horst ,*The Utrecht Psalter in Medieval Art：Picturing the Psalms of David,Studies in Medieval and Renaissance* Art History,1996.鼓みどり『ユトレヒト詩篇写本研究—言葉の織りなしたイメージをめぐって』中央公論美術出版、2006年。典礼に於ける所作が様式化したこの時期についで大きな変化があったのは13世紀である。手振りの表現性はそれと連動しており、「Mahiet」様式の背景には諸儀式における革新があると思われる。

(37) ゴフは、ダヴィデとソロモンと並んで、聖王ルイは、ユダ王国の王ヨシュアに喩える言説について詳述している。ゴフ、前掲書。pp.476-493。ダヴィデとのアナロジーに関しては特に以下を参照した。Jerzy Pysiak,"Saint Louis as a New David and Paris as a New Jerusalem in Medieval French Hagiographic Literature", *The Character David in Judaism, Christianity and Islam,Series*：*Themes in Biblical narrative*,vol.29.2021.pp.154-187.

(38) Ibd.,pp. 172～179.

(39) サント＝シャペルについては主に以下を参照。
Exposition Saint Louis、*op.cit.*, Françoise Perrot,LaSainte-*Chapelle de Paris*,Editions du Partrimoine,Centre dus Monuments nationaux,Paris,2013.高野禎子「パリ、サント・シャペルのステンドグラスーエゼキエルの窓を中心に—」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』第21巻、2013年。pp. 87-115。

(40) ラウル・ド・ブレール訳アウグスティヌス『神の国』については以下を参照。Raoul de Presles | Arlima-Archives de littérature du Moyen Âge（2022年７月30日閲覧）

(41) 全訳および「百合の花の紋章」の起源については、小池、前掲書「IS」。原文はA. Lombard-Jourdan,*op.cit.*にもとづく。

(42) *Ibd*.,p25.

(43) トゥールのグレゴリウス、前掲書。p86。

(44) A.Lombard-Jourdan,*ibd*.,p27.

(45) 所蔵図書館の公式サイトによると、1480年頃パリでの制作、コエティヴィの画家（Maître de Coëtvy）とされるが、同画家の他の写本挿絵と比較すると様式的相違があり、断定はできない。15世紀「ロイヤル・タッチ」の希有な作例。